

支部見聞録 (関東支部)

From つくば市



▲学園都市中心部からつくば山をあおぐ

## 研究学園都市が拓く、明日のまちづくり

茨城県つくば市は2005 (平成17) 年のTX (つくばエクスプレス) 開通によって沿線の開発も進み、周辺地域を含めて、つくばはその都市機能をさらに充実させつつある。筑波研究学園都市の建設計画がスタートして50年<sup>\*1</sup>。豊かな自然と旧来の農村文化が息づく地に、理想を求めて計画的に作られたまちとしての研究学園都市は今どのような姿を見せ、そしてどこへ向かおうとしているのだろうか――。

### 新しいフェーズをむかえた、つくばのまち

東京都心の秋葉原から、TX (つくばエクスプレス) 快速で45分。地下にあるつくば駅から地上に出てバスターミナル脇の大階段を上れば、ペDESTリアンデッキ<sup>\*2</sup>上に並木の緑も豊かなセンター広場が広がる。並木の間を筑波大学へと向かう若者たちが自転車を走らせ、犬を散歩させる人や乳母車を押す女性の姿が見える。研究者かビジネスマンか、欧米男性のグループが議論

しながら行き過ぎていく。まちには約48kmにわたってペDESTリアンデッキが張り巡らされ、建設当初は頼りない太さであったろうケヤキの木が、今は大木になって緑陰をつくる。一方、つくば駅隣の研究学園



▲バスターミナルの屋根には太陽発電機が設置されている

取材・写真協力/つくば市役所企画部

駅周辺の葛城地区では、区画整理が進められ、広大な土地に市役所や戸建て住宅、マンション、近隣地区最大級のショッピングモールなど新しい風景が次々に姿を現している。



▲センター広場から続くペDESTリアンデッキ

研究学園都市が形づくられ、研究機関のつくば移転が完了したのは1980 (昭和55年) 年。研究学園都市は南北に長く、公共施設や商業施設を集めた都心地区を中心に、大学と研究機関から成る研究教育施設地区、商業施設や学校などとセットで住宅地区が配置された。車道も歩道も広く、施設は敷地と道路との境界から30mの距離をとってたっぷり余裕をもたせて建てられ、豊富な植栽が施されて緑豊かなまちを形づくった。筑波大学と、国などの研究機関の3分の1が集まり、現在では21,000人の研究者と18,000人の学生、1,500人を超える留学生在が暮らし、周辺地区も含めると市は1970 (昭和45) 年当時の3倍近い20万人を超える規模に成長し、さらに人口は増え続けているという。年月の経過とTX開通による変化は大きく、茨城県とつくば市は2010 (平成22) 年「新たなつくばのランドデザイン」をとりまとめた。さらにこれを踏まえて市では2012 (平成24) 年、「研究学園地区まちづくりビジョン」を策定した。

### つくばならではの先進的なまちづくりの取り組み

「豊かな自然と、研究機関と人的資源双方にわたる知の集

\*1 1963 (昭和38) 年、この地への研究学園都市建設が閣議で了承された

\*2 つくば市ではデッキ構造のものだけでなく、デッキ構造を有しないものも含め歩行者専用道路全般を指す





▲研究機関のなかには、常設展示を行っている施設も多い。土・日・祝日には6施設を循環するつくばサイエンスツアーバスも運行されている



▲まちのシンボル「つくばエキスポセンター」のロケット模型

積、そして計画的に作られた緑豊かな環境とすぐれた都市機能。つくばが持つこうした財産を活かして、さらに魅力あるまちづくりを進めていくことが、課題です」と、つくば市企画部企画課の担当者はいう。実際のところ、昨今は政府機関の独立行政法人化や公務員宿舎の廃止などによって土地が売られ、街並みにそぐわない景観が現れたり、道路に接して建物が建て植え込みや並木からなる緑地帯が分断されたりといった問題も出てきている。これに対し、市は地区計画による規制をかけてまちの環境保全を図っているという。こうした「守る・継承する」施策はもちろん、まちづくりビジョンでは未来へ向けての積極的な方針を打ち出している。施策は数多いが、「なかでも、つくばならではの取り組みは」と訊ねると、「『つくば環境スタイル』でしょうね」という答えが返ってきた。

これは、先進的な研究開発の地として「低炭素都市の実現」を目指して打ち出されたもの。例えば普通セグウェイ（電動立ち乗り二輪車）のようなパーソナルモビリティは道交法上公道を走行できないが、特区を設けてこれを可能にして実用化テストを行っている。また、自家用車中心からバス・自転車などを活用した交通体系への転換も進められ、すでに公共交通再編やバスターミナルのあるつくば駅前広場の整備は完了し、乗り合いタクシーのシステムも導入。やはり特区扱いで耕作放棄地を転用して藻類バイオマスエネルギー実用化事業なども実施している。その他、緑地と果樹園や菜園つき宅地をセットで開発して田園空間を創出する「緑・住・農一体型住宅」の試みや、子どもたちの環境教育（つくばスタイル科）にも力が入れているなど、その内容は多岐にわたっている。



▲ペDESTリアンデッキ上にさまざまな店が並ぶ「つくばセンターマルシェ」



▲特区に指定された中心地区を巡回するセグウェイ

この他、まちの魅力を増すための試みとして、ペDESTリアンデッキなどの公共空間の利用が進められている。センター広場のデッキ上では「つくばセンターマルシェ」と称して土・日を中心に21店舗のさまざまな業種の路上店舗が店を開き、その運用と効果を実証実験中。市の担当者いわく「口コミで人気を呼ぶ店も出てきました」という。

### 産学・行政、そして市民の協働がまちに新しい魅力をつくり出す

こうした取り組みが産学や行政はもちろん市民も含めた協働によって行われているのも、つくばならではの特徴で、自主的な市民活動も盛んだという。学園都市地区に移り住んだ、主に大学や研究所関係者とその家族からなる新住民は、自然志向や環境意識、市民活動へ意識の高い人が多く、古くからの住民にもさまざまな局面で刺激と活力を与えた。TX開通以後、葛城地区の新興住宅地に移住してきたいわば新々住民といえる人々も同様だ。「とりわけまちづくりに関して意欲的な人が多いと思います」と市の担当者も言う。まちづくり協議会と市民が協力して千本の桜を植えようという活動を進めたり、研究学園駅前の公共空間を使ってイベントを催したいという要望が出るなど、地主でもある昔からの住民も一緒になって次々に新しい動きが生まれている。

多彩な研究施設の存在やすぐれた都市環境だけでなく、産学の連携やつくばならではの小中学校教育（ICTを活用した生徒自身による研究発表型授業）など、つくばはソフト面でも多くの財産を擁している。そして「人」もまた、つくばの大きな力だ。つくばがもつ財産と協働による魅力あるまちづくりへの取り組みが前向きな意識をもつ人を惹きつけ、そうした人々が新風を吹き込んでさらに魅力あるまちづくりへと続いていく。インフラの老朽化や大規模な商業施設が次々とオープンしたことによる都心地区の求心力低下への対策など課題も多い。しかし、先進的・実験的な研究学園都市としてスタートしたつくばは、まちづくりという側面でも多くの実りと示唆を、これからも与え続けてくれることだろう。

### 別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください!  
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>



H-IIロケットの見学や宇宙飛行士訓練を体験できるサイエンスツアーに行ってみませんか?